

『今どうあるべきか』 ヤコブの手紙 5章 7~20節

ヤコブの手紙も、最後となりました。ヤコブ5章は、前半は金持ちたちへの警告が記されていました。彼らは必死に財宝を蓄えていますが、「終わりの日」には、それらはさびた金銀のように何の役にも立ちません。それに対して本日の7節からの後半部は主にある兄弟たちへの勧めが記されています。ヤコブは、終わりの挨拶も祝祷もなしで、この手紙を終えていますが、彼の心には、この手紙を受け取った人たちに対して、愛と祈りが満ちあふれています。それが良い行いです。

本日の箇所には、四つの事柄が語られていますが、さばきの主の来臨が間近いことを覚え、今どうあるべきか、また、教会の中の苦しんでいる人、病んでいる人、罪を犯した人、信仰の道から迷い出そうな人についての具体的な勧めをしています。

- ① 耐え忍びなさい…7~11節
- ② 誓ってはいけません…12節
- ③ 互いに祈り合いなさい…13~18節
- ④ 罪人を取り戻しなさい…19~20節

1. 耐え忍びなさい

第一に「耐え忍べ」ということです。7~9節に「ですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は大地の貴重な実りを、初めの雨や後の雨が降るまで耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。兄弟たち。さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい。見なさい。さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。」とあります。「さばきを行う方が戸口のところに立っておられます。」は、イエス様のご自分の再臨についての教えに基づく表現です。「さばきの主が戸口のところに立っているので、農夫が豊かな収穫をもたらす雨を待つように、主を待ちましょう。」ということです。

高ぶり（傲慢）の反対語は、へりくだり（謙遜）ですが、その態度は、主権者である主のさばきにゆだね、困難の中で耐え忍んでさばきの主の来られるのを待つことです。「来られる時」という言葉はギリシア語では、王や総督が領地を公式に巡回訪問する場合に用いられる言葉です。例えばマタイの福音書24章27節に「人の子の到来は、稻妻が東から出て西にひらめくのと同じようにして実現するのです。」とあり、同じ24章37節には、「人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。」とあります。

「耐え忍びなさい」は、ここでは、4~6節に「見なさい。あなたがたの畠の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。あなたがたは地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、屠られる日のために自分の心を太らせました。あなたがたは、正しい人を不義に定めて殺しました。彼はあなたがたに抵抗しません。」とありましたが、金持の不当で横暴な仕打ちに対して自分で復讐するのではなく、主のさばきの時を待ち望む忍耐を指します。初代教会は、主の再臨が間近いという緊張感と希望を持って生きていました。この信仰が、試練の中で固く立つ忍耐の秘訣でした。「兄弟たち。さばかれることがないように、互いに文句を言い合うのはやめなさい。」とありますが、やがて主のさばきの前に立たされることを覚える時、兄弟をさばいて不満をぶつけ合うことに対して打ち勝つことが出来るのです。

10~11節に「兄弟たち。苦難と忍耐については、主の御名によって語った預言者たちを模範にしなさい。見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いだと私たちは思います。あなたがたはヨブの忍耐のことを聞き、主によるその結末を知っています。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられます。」とあります。苦難を耐え忍んだヨブを祝福されたように、あわれみに満ちた主は豊かに報いを用意しておられます。ヤコブは預言者たちを引合いに出していますが、イエス様

もマタイの福音書 5 章 12 節で「喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。」と教えの中で、預言者たちを引き合いに出し語っています。

ヨブへの言及は新約聖書においてはここだけですが、ユダヤ人にとっては、「ヨブの忍耐」はよく知られていたようです。ヨブ記を見るとヨブは、ウツという場所に住んでいた異邦人です。ユダヤ人ではありません。律法についての事柄が記されていませんので、アブラハムの時代の人物のようです。

ヨブが、苦難を受けるようになった理由が天井の会議の中で示されています。もしヨブがこの部分を知っていたら、あれほど悩まなかったと思います。人生には、いろいろな苦しみがあります。正しい人と思える人、義人と思える人が、いわれのない苦しみに会う場合があります。しかし、実はヨブ記は、義人がなぜ苦しまなければならないかの理由が書かれた本ではありません。ヨブ記の中心テーマは、正しい人が理解できない苦しみにあった時にどのように乗り越えるべきかを教えているのです。なぜ、苦しみに会うのかと説明しているのではなくて、苦しみにあった時に、どのような態度をとるべきかを教えています。

ヨブ記 38 章で神は直接ヨブに語りかけ、ヨブは、神から答えを頂きます。ヨブは、ここで自分がなぜ苦しんだのかという最終的な答えを頂いたのではありません。ここには最終的な答えはありません。ここには、神がヨブに質問しています。そしてヨブは、42 章 2~6 節で「あなたには、すべてのことができる事、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました。あなたは言われます。「知識もなしに摂理をおおい隠す者はだれか」と。確かに私は、自分の理解できないことを告げてしまいました。自分で知り得ない、あまりにも不思議なことを。あなたは言われます。「さあ、聞け。わたしが語る。わたしがあなたに尋ねる。わたしに示せ」と。私はあなたのことを耳で聞いていました。しかし今、私の目があなたを見ました。それで、私は自分を蔑み、悔っています。ちりと灰の中で。」と語りました。困難の答えはありませんでしたが、しかし、ヨブは、それで満足したのです。ヨブは、その質問を聞きながら二つの事を満足したのです。

① 謙遜

神の前でヨブは、一つ一つの質問を聞きながら、謙遜になって行きました。神と自分は、違うということを発見したのです。ヨブの信仰を訓練するために神は、あえてその苦しみの原因を説明しなかったのです。その時ヨブは、神がご自身を明らかにされたことに満足し、神が明らかにされなかつたことにも満足を感じたのです。

私は、聖書を読み、神の愛の十分さに満足します。それと同時に、神が私に明らかにされていない事の故に満足を感じます。なぜならば、見えないものがあってこそ、わからないことがあってこそ、信仰が働くのです。神は、ヨブの信仰を働くために、このように取り扱ってくださったのです。

② 神はご存知である

ヨブが、発見した二つ目は、自分が苦しんだ時に、友だちと論争したその言葉を神が、全部ご存知であるということを発見しました。自分は、一人だと思ったが、決して一人ではなかった。苦しみの真中に神が共にいてくださったという事をヨブは発見した時に、神の前に満足をしたのです。

11 節後半の「主によるその結末を知っています。」は、ヨブ記 42 章 10 節に「ヨブがその友人たちのために祈ったとき、【主】はヨブを元どおりにされた。さらに【主】はヨブの財産をすべて、二倍にされた。」とありますが、単に肉体的、物質的な回復だけではありません。詩篇 103 篇 8 節に「【主】はあわれみ深く情け深い。怒るのに遅く恵み豊かである。」とありますが、ヨブは神があわれみに満ちておられる方として知ったからです。この「忍耐」は、試練の中で固く立つ不屈の態度を意味しています。

2. 誓ってはいけない

第二は、「誓うな」ということです。12 節に「私の兄弟たち。とりわけ、誓うことはやめなさい。天にかけても地に

かけても、ほかの何にかけても誓ってはいけません。あなたがたの「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありなさい。そうすれば、さばきにあうことはありません。」とあります。この「誓うな」は、どんな誓約もするなという意味ではありません。ヤコブは「さばきの主」の来臨を待つ態度に、イエス様のマタイの福音書5章34~37節に「しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地にかけて誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムにかけて誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。自分の頭にかけて誓ってもいけません。あなたは髪の毛一本さえ白くも黒くもできないのですから。あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです。」という誓いの禁止の教えを結び付けています。語るすべての言葉についてやがてさばかれることを常に覚えて、誠実に、責任のとれることだけを語るように勧めています。

また、イエス様はマタイの福音書12章36~37節で「わたしはあなたがたに言います。人は、口にするあらゆる無益なことばについて、さばきの日に申し開きをしなければなりません。あなたは自分のことばによって義とされ、また、自分のことばによって不義に定められるのです。」と語っています。全てをご存じの上で正しくさばかれる主の前では、軽々しく誓うことなどとてもできないと思います。できることをするだけで良いのです。

3. 互いに祈り合いなさい

第三は、「互いに祈り合え」ということです。13~16 節に「あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。あなたがたのうちに病気の人がいれば、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈つてもらひなさい。信仰による祈りは、病んでいる人を救います。主はその人を立ち上がりさせてください。もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます。ですから、あなたがたは癒やされるために、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、働くと大きな力があります。」とあります。主が来られる時を待ち望みつつ生活していく中で経験する苦しみや病、また罪を犯すことの故に祈りが不可欠であることを、ヤコブは教えています。

「苦しんでいる人」とは、様々な逆境の中で苦しむ人を指します。ヤコブの教える忍耐は、苦しみの中で自力で歯を食いしばって耐える忍耐ではなく、神に向かって叫び、神の助けを待ち望む忍耐です。

「信仰による祈り」は、ヤコブの書 1 章 6 節に「ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。」とありましたが、少しも疑わずに信じて願う祈りです。そのような祈りには病人をいやす力がありますが、それはその祈りに応えて下さる主の力が働くからです。

ヤコブはここで病人のための祈りから、キリスト者お互いの祈りへと広げています。また、信仰の祈りから「正しい人の祈り」へと視点を変えられています。以前の訳では、「義人の祈り」となっています。「義人」とは、特別な人という意味での義人ではなく、イエス様を信じて、罪赦された人、それゆえ神の義とされた人という意味です。自分自身に頼らず、イエス様のみを自分の正しさとして、この方の知恵によって生きる人のことなのです。そういう人の祈りには力があるのです。そして、神の赦しの約束のあるところで「互いに罪を言い表し」合うことが可能となるのです。罪の告白と赦しは、神との関係を回復させるだけではなく、互いの間の交わりをも回復させ深めるのです。そのような交わりの中にいやしが与えられるのです。罪からくる病もありますが、そんな場合にも愛をもって祈ることが大切です。

17~18 節には「エリヤは私たちと同じ人間でしたが、雨が降らないように熱心に祈ると、三年六か月の間、雨は地に降りませんでした。それから彼は再び祈りました。すると、天は雨を降らせ、地はその実を実らせました。」とあります。エリヤの祈りをヤコブは「正しい人の祈り」の例として挙げています。エリヤはユダヤ人にとって特別な意味を持った人物でした。エリヤのように信仰をもって祈るなら、病はいやされ、罪も赦されるとは、何と大きな恵みでしょうか。

しかしヤコブは、彼が特別な人ではなく「私たちと同じ人間」であることを強調しています。それなら、エリヤが

神に従うことができて、私たちが従うことできないということは、決してないはずです。ですから、私たちも祈りにおいてあきらめない者になりましょう。救われてない家族や友人の救いの為に今まで何度も祈ったし、福音も伝えた、という理由であきらめてはいけません。主はエリヤの祈りに応え天の窓を開いて下さったように、必ず主は家族の上に救いの扉を大きく開いて下さいます。祈り続けましょう。

4. 罪人を連れ戻しなさい

第4に「罪人を連れ戻せ」ということです。19~20節に「**私の兄弟たち。あなたがたの中に真理から迷い出た者がいて、だれかがその人を連れ戻すなら、罪人を迷いの道から連れ戻す人は、罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおうことになるのだと、知るべきです。**」とあります。「**真理**」とは、イエス様に対する信仰についての使徒たちによって伝えられた教えのことです。当時、兄弟たちのうちで正しい信仰から迷い出る人があったのでしょうか。そんな人を再び真理に連れ戻すことは、貴い働きです。このことも、信仰の祈りなくしてすることはできません。

この箇所の背後には、1匹の迷い出た羊を捜し求めて連れ戻す人の例えと、マタイの福音書18章12~14節に「**あなたがたはどう思いますか。もある人に羊が百匹いて、そのうちの一匹が迷い出たら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。まことに、あなたがたに言います。もしその羊を見つけたなら、その人は、迷わなかつた九十九匹の羊以上にこの一匹を喜びます。このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。**」とある罪を犯した兄弟を悔い改めに導くことについてのイエス様の教えがあると思われます。

「**真理から迷い出た者**」は当然行いにも現われてきます。罪を犯し、罪の生活へとのめり込んでいくのです。このような人のために祈ることは、なかなか難しいことでもあります。しかし、それは20節に「**罪人のたましいを死から救い出し、また多くの罪をおおうことになる**」とある通りです。ペテロ第一4章7~8節には、「**万物の終わりが近づきました。ですから、祈るために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。**」とありますが、イエス様が私たちに求められていることなのです。これは罪を隠すことではありません。罪を犯した後で、それを悔い改めた人の、その罪を思い出さないということです。私たちは、イエス様の十字架のゆえに義と認められ、神の家族とされました。だからこそ、互いのために祈り合うことが大切です。

詩篇77篇1~4節に「**私は神に声をあげて叫ぶ。私が神に声をあげると神は聞いてくださる。苦難の日に私は主を求め夜もすがらたゆまず手を差し伸ばした。けれども私のたましいは慰めを拒んだ。神を思い起こして私は嘆き悲しむ。思いを潜めて私の靈は衰え果てる。あなたは私のまぶたを閉じさせません。私の心は乱れてもの言うこともできません。**」とあります。祈りのはじめは神に向かって祈り始めます。けれども、神の慰めを求めて祈ったけれども、神は答えてくださらないので慰めを求めるなどを諦めてしまいます。5~10節に「**私は昔の日々遠い昔の年月について考えました。夜には私の歌を思い起こし自分の心と語り合い私の靈は探し求めます。主はいつまでも拒まれるのか。もう決して受け入れてくださらないのか。主の恵みはとこしえに尽き果てたのか。約束のことばは永久に絶えたのか。神はいつくしみを忘れられたのか。怒ってあわれみを閉ざされたのか。**」セラ「**私はこう言った。「私が弱り果てたのはいと高き方の右の手が変わったからだ」と。**」とあります。この祈り手もさんざん神に対して文句の言葉を並べ立てて、自己憐憫に浸ろうとしていたのですが、後半から急に祈りが変わります。11~14節に「**私は【主】のみわざを思い起こします。昔からのあなたの奇しいみわざを思い起こします。私はあなたのなさったすべてのことを思い巡らしながらのみわざを静かに考えます。神よあなたの道は聖です。私たちの神のように大いなる神がいるでしょうか。あなたは奇しいみわざを行われる神。国々の民の中で御力を現される方。**」とあります。祈りを通して、イエス様と向き合い、そして、イエス様と出会い、このイエス様と共に歩む道を見出していくことができるのです。す。それが、私たちの祈りの生活となるならば、私たちは、この神によって確かな道を歩むことになるのです。